

船井情報科学振興財団
Funai Overseas Scholarship 2022 年度奨学生
第8回報告書（4年目7～12月）

坂田莉奈
University of Cambridge,
MRC Laboratory of Molecular Biology, PhD Program

1. はじめに

英国ケンブリッジ大学・MRC Laboratory of Molecular Biology (MRC-LMB) にて博士課程に在籍しております、坂田莉奈です。留学開始から約4年が経過しました。本報告書では、2025年7月から12月までの研究活動および生活の状況についてご報告いたします。

2. 研究活動

(1) 国内学会参加：UK Stem Cell Network

2025年9月にマンチェスターで開催された国内学会「UK Stem Cell Network – Inaugural meeting」に参加しました。本会は、英国内の幹細胞研究者を横断的につなぐ新たなネットワーク「UK Stem Cell Network」の設立を目的とした発足会議でした。

英国は幹細胞研究が盛んな国という印象が強い一方で、ロンドンやケンブリッジなどの研究拠点を離れると関連研究者が比較的少なく、国内であっても研究者間の情報共有や連携の機会が限定的であることが課題として共有されました。こうした背景から、ネットワークとして研究者同士の接点を増やし、組織として政府・関連機関からの支援を受けやすい体制を整える重要性が議論されました。加えて本学会では、すでに当該分野で実施されている国際会議の開催だけでなく、地理的に近い研究者同士の連携を日常的に強化する意義が強調されていました。研究内容そのものだけでなく、研究環境やコミュニティ形成について研究者が一堂に会して議論する場は新鮮であり、多くの学びを得ました。

私は本学会ではポスター発表を行い、同じく英国で染色体異常の研究を行うThe University of SheffieldのProf. Barbaricの研究室メンバーとも初めて交流することができました。研究内容に関する具体的な議論に加え、今後の情報交換の足掛かりも得られた点で非常に有意義でした。

(2) 出身ラボ訪問：University of British Columbia (UBC) 谷内江研究室

2025年7月には、船井の交流会参加にあわせて、学部・修士課程でお世話になったUniversity of British Columbia (UBC) の谷内江研究室を訪問しました。研究室を訪れるのは約3年ぶりであり、現在私が取り組んでいる研究内容について発表する機会もいただきました。

当時の専門であった合成生物学と、現在の研究分野である発生生物学は大きく異なるため、久しぶりに合成生物学の近年の研究動向を研究室メンバーと議論でき、刺激になりました。また今回の訪問をきっかけに、現在所属するLMBでのラボとの共同研究にもつながっています。過去に関わっていたプロジェクトを別の形で再び発展させられる機会を得られ、嬉しいです。

(3) 論文執筆の進捗

この冬から、博士課程の成果をまとめた投稿論文執筆を本格的に開始しました。現時点では主に今までのデータを論文仕様の図へと整理しながら、論文のストーリーを構成している段階ですが、2026年1月末を一つの目標として原稿作成を進めています。

これまで図はKeynoteで作成していましたが、今回は初めてAdobe Illustratorも導入し、論文図の品質向上と作業効率の改善に努めています。共著者の進行管理に依存せず、自身で計画的に推進できるよう、日々の研究時間配分も見直しながら論文執筆に励んでいきます。

3. 生活

(1) ケンブリッジでのサッカー観戦

今年の冬は帰省をしませんでしたが、代わりに弟が英国へ遊びに来てくれました。ロンドンおよびケンブリッジの観光に加えて、サッカー好きの弟の希望で、ケンブリッジのプロサッカーチーム「Cambridge United」の試合を初めて観戦しました（英国リーグ4部相当）。

平日の夜の試合にもかかわらず会場は非常に盛り上がっており、試合が勝利したことも相まって熱気を強く感じました。一方で、観客の掛け声や言葉遣いなど、普段の学術都市ケンブリッジの印象とは異なる独特の雰囲気もあり、英国のローカルな文化を体感する機会にもなりました。会場では「Bovril」という伝統的な温かい飲み物も初めて飲んでみましたが、個人的にはカップラーメンのスープのような味わいでしました。

(2) モロッコ（マラケッシュ）

また、これまで訪れたことのないアフリカ大陸を体験してみたいと思い、ヨーロッパから比較的近いモロッコのマラケッシュを訪れました。ロンドン・スタンステッド空港からの往復航空券は約55ポンドと比較的手頃で、移動含めて三日間という短期間でも実現しやすい旅行でした。

モロッコはアラブ、アフリカ、ヨーロッパの文化が交差する国であり、マラケッシュはイスラム文化の影響が色濃い都市として知られています。市内には「Ben Youssef Madrasa（ベン・ユセフ・マドラサ）」など歴史的建築も多く、観光地としての魅力が高い一方で、東京のように人々が日々の生活で忙しくしている大都市的な雰囲気（しかし東京より圧倒的に雑）があり、そこがまた楽しめました。



(図1) Cambridge Unitedのホームグラウンドにて
(中央はマスコット)



(図2) マラケッシュの市場にて
(カタツムリのスープを堪能)

4. 最後に

船井情報科学振興財団の皆さんには、日頃より温かいご支援をいただき、心よりお礼申し上げます。おかげさまで研究・生活ともに充実した環境の中で博士課程を進めることができます。ケンブリッジでの博士課程も残すところ約1年弱となり、研究成果を確実にまとめ、論文として形にできるよう努めてまいります。